よい先生 よくない先生

友田静恵

俗に良妻・悪妻ということばがあるが、教師にも子どもの側からみて、よい先生・わるい先生というのはあるのではなかろうか。

こんなことをいうと多くの先生がたから、お目玉をちょうだいしそうである。教師という名の職業は聖職である。だから悪い先生なんてあるはずがないと。しかし、私は幾人かの教師の中に、子どもからみて、好ましい先生と好ましからざる先生があるように思える。例外もあるが、いったいに好ましからざる先生というのは、教職について三年ぐらいからの教師にみられるようだ。女性が妻の座についてもこの年限からそろそろ、悪妻という名をたてまつられるようだ。新婚そうそうは、どうしたら良妻になれるかと婦人雑誌をひもどき、お化粧をくふうし、お料理を勉強するが、三年もたてば自分の座に安定感をもち、夫への愛情の表現も、料理もマンネリになる。これと同様、教師も新卒当時は、教育愛に燃え、どうしたらよい先生になれるか、どうしたら子どもの心がつかめるかと心をくだくものである。しかし、教職になれてくると、卒業当時の情熱がだんだんうすらいでいくように思われる。先日、私の園に女子大生が教育実習に来たとき、私たちについての感想をきかしてほしいというので、今の情熱を教職にあるかぎり持ち続けてほしいと注文をつけておいた。これは無理なことであろうか。燃えるような教育愛をもって就職はしたものの、待遇の裏づけがな

かったり、それぞれの園の環境において、じゅうぶんに教育の花を咲かせることのできない場合もあると思う。しかし、教師としてたえず、新鮮な気持で子どもたちに接することは、教職にある身としてたいせつなことではなかろうか。

次に教師のいくつかのタイプをあげて、ご参考に供しよう。

◎注　ここでいう、よい先生、わるい先生というのは、子どもの側からみてのものであるから、研究面や指導技術についてではなく、主として子どもの扱い方や子どもとの接し方についてである。

×　×　×

子どもへの愛情を具体的に示してやれる先生

子どもは常に、おとなに愛されたいという欲求をもっている。その表われの一例として「先生、お早う。」「先生、何かして遊ぼう。」といって教師の手にぶらさがりにくる。これは入園当初よりも、いくらか園生活に馴れてきた頃からみられる傾向である。入園当初は緊張感をもっているために、まだ教師に親近感をもつまでにいたらない。しかし馴れてくると、自己中心性の子どもの本領を発揮して、仲間の中で自分が一番、教師の愛情を受けたい。愛されているという優越感をもちたいという欲求からのように思われる。だから教師の手を独占して、あるいは、教師の体温を通して、その愛情を確かめてみようというのである。園生活がはじまって、一か月もすると教師の両手には幾人もの子どもたちがぶらさがり、手がいくつあってもたりない状態である。これを依頼心とみて「そんなに先生の手にぶらさがってはいけません。あっちへ行って遊びなさい。」と突きはなす教師と「あら、○○ちゃんの手はあったかいわね。○○ちゃんの手は、おにいさんみたいにがっちりしてきたわ。」などと愛情をこめて握り返して、一応要求をみたしてやり、「さあ、先生の手につかまっていたんでは遊べないから、みんなでじゃんけんして、鬼ごっこをしましょう。」と遊びへ誘導する。また、子どもが病気で休んでいるとき、見舞にいくとか、欠席のあとの登園のとき、子どもの頭をなでながら、あるいは手を握りしめ「○○ちゃん元気になってよかったわね。○○ちゃん

がお休みだと、先生はとても寂しかったわ。」といって親愛の情を示すようにする。あるいは、二学期の始業式の日、休暇中の生活発表のあとなど「お休み中にどのぐらい大きくなったか、抱っこしてみましょう。」といって、ひとりひとりを抱っこして「わあ、重い、一学期よりもとっても重くなったわ。」「〇〇ちゃんはずいぶん背が伸びたのね。」などといってクラスの子ども全部を抱っこしてやると「キャッ、キャッ。」といいながら大喜びをする。私など四十人ものクラスの子どもを抱いてやると、三十人め頃から腰が伸びなくなるほどくたびれるが、体温を通して子どもたちは教師との結びつきをより強くする。このことによって学期はじめにみられる退行性の子どもも、スムーズに集団生活にもどれるものである。こんなことをかくと、それはゼスチュアーであって真の愛情ではないといわれる向きもあろう。しかし、子どもは具体的でなければ理解しにくいものである。だから、おとなの目からみれば、ゼスチュアーとみられる行為も、子どもの目からは「先生は、自分のことをあんなにかわいがってくださる。」と情緒的な安定感をもつのである。

× × ×

いつもにこにこした先生

いつも微笑をたたえ、明かるい態度で子どもに接することもたいせつである。私たちは幼児期の人格形成というたいせつな仕事を受け持っているので、とくに、このことは忘れてはならない。にこにこした先生、このことはいまさら申しのべるまでもないことであるが、なかなか実行のできないことである。きまじめな顔、苦虫をかみつぶしたような顔、怒っているような顔の先生はどうしても子どもから敬遠される。

たとえば、朝、子どもが登園してきて、「先生、お早う。」といっても、机に向かって事務をしながら見向きもしないで、「お早う。」と気のない挨拶をする先生がいる。やはりどんなに急ぎの事務があっても「お早う、〇〇ちゃん、はやかったのね。」とひとことにこにこ顔でこたえてやると、一日の子どものスタートが明かるくなる。このにこにこの応答にこそ、教師と子どもの温かい心の結びつきができるのではなかろうか。

にこにこせよといっても、身体の具合の悪いとき、精神的に問題のあるときなどは、なかなか笑顔はできないものである。このようなときの笑いは、かえっておかしなものである。だから教師は常に、身心両面の平和を保つ必要がある。このためには、私生活の面、職場での仲間どうしの協調性、健康な面でよりよい状態に常にあるように努力しなくてはならない。かつて私はこんな経験をしたことがある。

初夏の風薫る頃であった。子どもたちは文字通り初夏の薫風にのって、とびまわり、はねまわって遊んでいる中に、ある教師がブランコの柱にもたれ、放心状態で空のかなたをみつめている。子どもが「先生、おしてちょうだい。」といっても耳にはいらないのか、知らん顔である。子どもがブランコを降りて、「先生、おしてちょうだい。」といって手をひっぱったので、はじめて我に返ったように、ブランコを押してやった。これではどうみてもよい先生とはいえそうにない。この教師は私生活に問題があり（恋人との仲がうまくいかない）、それを職場まで持ち越していたのである。だから子どもに対してにこにこすることができない。それゆえ、教師という職業にある限りは身心両面の平和な生活が必要である。

いつ、どんな場にあっても、子どもが「先生。」と呼んだとき、「ハーイ。」といって笑顔でこたえてやれば、それだけで子どもは愛情にみたされ、満足感を味わうものである。

× × ×

子どもの要求をみたしてやれる先生

子どもは常に何々をしたい、こうしてもらいたいという欲求を持っている。この欲求がかなえられないと、いわゆるコンプレックスにおちいる。おとなの世界でさえも、給料が安いから賃上げしてほしいとか、もっと仕事を楽にしてほしいなど、いろいろな要求をする。これがかなえられると、うちの社長は話がわかるとか、うちの園長はよい園長だということになる。ましてや未分化な成長の段階にある幼児であってみれば、

「先生、開戦ごっこやろう。」「いま疲れているからあとでね。」

「先生、ありんことってきたから、おうち作って。」「いい子だから自分で作りましょう。」などと子どもの要求をみたしてやら

ない教師は、やはり子どもの側からみてよくない教師である。このようなことがたび重なると、子どもは遊びにも意欲を失い幼稚園までがきらいになることがある。だから、なるべく幼児の要求をかなえてやり、活発な活動ができるように助けてやらなくてはならない。そのためには、子どもが要求してくることをかなえ、教師も同じ立場で遊んでやったり、教師の立場で教育的な目をそそいでいくようにしなくてはならない。

また、要求のかなえ方にも、子どもの成長に歩調を合わせて、そのとき、そのときに感じた扱い方を、教師としてはくふうしていく必要があろう。

たとえば、「先生、何かして遊ぼう。」と子どもが誘ってくる場合。「ええ、○○をしましょう。」といつも教師が遊びの仕方や遊びを考えてやるのでなく、「何がいいかしら、考えてちょうだい。」とか、「それはいい考えね。じゃあ、みんなだけで遊んでごらん。先生はしばらくみせてもらって、それから仲間にはいるわ。」などと段階的な要求のみたし方を考えなくてはならない。いずれにしても教師は子どもの要求をみたしてやることが先決で、それからの扱い方は教師のテクニックである。また、子どものやりたいと思うことの先手を打ち、その遊びに必要な用具や材料をととのえてやるとか、場の構成を考えてやるということも、「あっ、僕の先生ってなんてよい先生だろう。僕のしたいと思っていることをちゃんとわかるんだからな。」と思うからである。

夫婦生活も何十年になると、夫が何をたべたいと思うか、何を妻にしてもらいたいと思うかということが、良妻にはわかるそうである。私は夫婦生活は短い経験しかもたなかったのでわからないが、幼児との生活は長いので、子どもがどう思っているか、何をしたいと思っているかということは、顔つきや行動をみるとすぐわかるような気がする。

以上三つの例をあげてのべてみたが、このほか、教師としての適切な身なりなどについても、子どもは深い関心をもっているので、教師としての適切な服装と心の粧いとをととのえて、子どものよい教師になりたいものである。

（東京・牛込仲之幼稚園）

× × ×